

[成果情報名]ブドウ「サニールージュ」における環状剥皮処理の果皮着色向上効果

[要約]ブドウ「サニールージュ」では、満開 30～40 日後に主幹部へ 1cm 幅の環状剥皮処理を行い剥皮部位の保護のために接ぎ木テープを巻く処理で着色が向上し、酸含量も低下する。環状剥皮部は 1 ヶ月後には癒合し、翌年の花穂着生率への差はみられない。

[キーワード]環状剥皮、サニールージュ、着色向上、果実品質

[担当]宮崎県総合農業試験場・果樹部

[代表連絡先]電話 0985-73-2121

[分類]研究成果情報

[背景・ねらい]

ブドウ「サニールージュ」は、中元の贈答用にも利用できる早生の赤系品種として県内でブランド化された有望品種であるが、近年、産地では着色不良を起こす事例が散見される。環状剥皮処理は簡単にできるブドウの着色改善対策だが剥皮部の癒合が不十分な場合は樹勢の低下を引き起こすことが報告されている。そこで、「サニールージュ」の着色向上を目的とし、環状剥皮処理をした際の翌年の花穂数への影響を連年確認するとともに、環状剥皮処理技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 環状剥皮処理を満開（2016年：4月28日、2017年：5月1日）の30日後、40日後にそれぞれ地上1mの主幹部へ1cm幅で行い、剥皮部位の保護のために接ぎ木テープを巻くと、処理から約1ヶ月後には、剥皮部位は癒合する。また、連年で処理を行う場合は、前年の処理場所の下方5cmの部位に行く（図1）。
2. 雨よけハウス、樹齢12年生、一文字型短梢剪定栽培において、着房数は主枝長1m当たり8房を基準として栽培し、展葉5枚時にジベレリン5ppmを花穂散布、満開3～5日後にジベレリン25ppm＋ホルクロルフエニユロン5ppm溶液に果房浸漬する管理において、収穫時の果皮色は環状剥皮処理を行った区で有意に高い（表1、図2）。
3. 環状剥皮処理時期で比較すると、満開後30日後処理より40日後処理の方が着色良好である（表1）。
4. 環状剥皮処理では、一粒重は無処理と差が認められないが、酸含量は低くなり、年により糖度が高くなる（表1）。
5. 環状剥皮処理による翌年の花穂着生率への差はみられない（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 宮崎県内の「サニールージュ」産地において、果皮着色向上技術として活用する。
2. 着果量を増やすと、着色不良の原因となるため、適正着果量である主枝長1m当たり8房を厳守する。
3. 樹勢が弱い樹には行わないよう留意する。
4. クビアカスカシバの加害を防ぐため、剥皮部位は接ぎ木テープ等で保護する。

[具体的データ]



図1 環状剥皮処理の状況（2017年）
（左側：剥皮時 右側：剥皮後30日後）

表1 環状剥皮処理時期の違いによる果実品質

処理区	果房重 (g)	粒数	一粒重 (g)	果皮色 (c.c.)	糖度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)
30日後区	224.1	36.6	6.5	4.7b	19.2	0.41b
2016年 40日後区	245.8	36.4	6.8	5.3a	19.0	0.38c
無処理区	207.3	32.9	6.4	2.0c	19.2	0.46a
30日後区	236.5	40.2	6.4a	6.3a	20.0a	0.38b
2017年 40日後区	230.6	42.3	5.7b	6.6a	20.4a	0.39b
無処理区	218.0	35.9	6.3ab	3.5b	19.4b	0.44a

c. c. 値は緑(0)～紫黒(12) 果実カラーチャート(農林水産省 1975)
1区1樹2反復(統計処理は1区20果房で行った)
一粒重、糖度および酸含量はTukey法をし、異なる英文字間は5%水準で有意差あり。
果皮色はSteel-Dwass検定をし、異なる英文字間は5%水準で有意差あり。

表2 環状剥皮処理による翌年の花穂着生率

処理区	花穂着生率 (%)
30日後区	50.0
2016年 40日後区	51.2
無処理区	54.8
30日後区	54.7
2017年 40日後区	60.2
無処理区	62.2



図2 環状剥皮処理時期の違いによる収穫果房（2017年）
（左側：30日後区 中：40日後区 右側：無処理区）

花穂着生率 = 花穂着生新梢数/全芽座数 × 100

(城戸皓大)

[その他]

予算区分：県単

研究期間：2016～2017年度

研究担当者：城戸皓大、栗野太貴、佐藤吉史、生頼由喜男、山口秀一、金丸俊徳

発表論文等：なし